Characteristics of experience and learning of nursing students with work experience : Elucidation from interviews centered on clinical training

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊東, 美智子, ITOH, Michiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20608/00001101

報告

社会人看護学生の経験と学びの特徴
― 臨地実習を中心とした語りからの解明 ―

伊東　美智子[1)]

Characteristics of experience and learning of nursing students with work experience
－Elucidation from interviews centered on clinical training－

Michiko ITOH[1)]

要旨

目的：臨地実習に絞って、社会人看護学生の学びの特徴をインタビューによって明らかにする。主なインタビュー内容は、これまでの経験の中で身につけてきた知識と、新しく学ぶ看護の知識とを再構築する上での、難しさや工夫点についてである。方法：半構成的インタビューを行い、質的に分析した。結果：これまでの経験が活きてきたこととして、【言葉や技の馴染みやすさ】により学習は進みやすく、患者との【関係性の構築】はスムーズであった。しかし、経験が仇になった例として、これまでの経験の【体験レベルは人さまざま】であるのに【社会人の呪縛】に苦しみながら、看護ならではの【コミュニケーションの違い】にも苦しんでいた。また、社会人学生たちは、周囲からの期待と自己との間で【葛藤】を抱えていた。考察：社会人学生たちは、経験から学ぶ力の三要素である【ストレッチ】【リフレクション】【エンジョイメント】を相互につなげ、循環させていた。

キーワード：社会人経験、看護学生、臨地実習、経験学習

Abstract

Objective: To focus on clinical training and clarify the characteristics of learning for adult nursing students through interviews. The main content of the interviews involved the difficulty and ingenuity in reconstructing knowledge acquired in previous experiences and newly learned nursing knowledge. Method: Semi-structured interviews and qualitative analysis. Result: The experiences I have gained so far were familiarity of words and skills and building relationships. However, as an

1）保健科学部看護学科

example of experience becoming a habit, students reported that while the experience level varies from person to person, **being an outcast of society?** they also suffered from a difference unique to nursing. In addition, working students had a conflict between their expectations and their own self. Discussion: Working students connected and circulated stretch, reflection, and enjoyment, which are the three elements of the ability to learn **of learning from experience**.

Key words: Working experience, Nursing student, Clinical training, Experiential Learning

はじめに

2012年度の日本看護学校協議会の調査[1)]によると、看護専門学校での社会人学生数は23.7%に及ぶ。そういった実態を受けて2015年3月、厚生労働省は「看護師養成所における社会人経験者の受け入れ準備・支援のための指針」[2)]を公表し、体制整備を促している。一般に、社会人学生の強みは入学までに豊かな経験を積み重ねている点にあるが、三木ら（2006）の先行研究では「社会人の経験が看護の学習にマイナスになっている部分がある」[3)]と回答した看護教員数が多かった。さらには「看護の世界で生きてきた者と違う価値観のようなもので固まっている人もいる（荒川、興梠、2014)」[4)]と、彼らへの教育の難しさを訴える声も少なくない。

そこで筆者はかつて、社会人学生に対して在学中の3年間をどのように過ごし、どのように看護を学んできたのかについてインタビューを行った。その結果、臨地実習の度に研究協力者（以下、協力者）の感情は下がり、実習終了と共に上昇することを繰り返しながら、卒業に向かっていることが分かった[5)]。臨床で看護を学ぶ上では時に社会人経験が邪魔となり、葛藤を抱える状態に陥っていたのである。

そこで、臨地実習における社会人学生の看護の学び、特に経験との関係に注目することが重要だと考えた。社会人学生の持つ豊かな経験知に、新しい看護の学びが加わることで何が起きるのかについて整理する。

研究目的

看護師養成学校で学ぶ社会人学生の、臨地実習における経験が活きることとそうでないことを語りの分析から明らかにする。また分析結果を、経験学習理論を用いて考察する。

用語の定義

社会人経験：社会に出て働いている個人であり民間企業等におけるパート・アルバイトを含む、看護職以外の就業経験。

社会人学生：社会人経験を経た後に看護師を目指す看護学生。

研究方法

1）研究デザイン：半構造化面接による質的帰納的分析を行い、経験学習理論で考察する。

2）研究協力者：現役社会人学生（看護専門学校3年生)。

3）研究協力者へのアクセス：ネットワークサンプリングを用いた。看護学校での勤務経験のある知人や研究者自身の知り合いを通し、研究協力への打診を看護教育機関の管理者（副学長や教務主任）に行った。その結果、承諾を得られた機関より本研究の協力者として条件に該当する人を推薦してもらった。選定に際し、前職の医療・福祉関係職の有無が、なるだけ半数ずつになるよう依頼した。その

後、研究者が協力者と個別に会い、研究説明に進んだ。

4）データ収集方法：調査日時はインタビュー協力者の希望日時と調整し、研究協力者が在学する学校や勤務する医療機関の面談室など、静かでプライバシーが守られる場所を借用した。インタビュー時間は60～90分程度とし、その内容をICレコーダーに録音し、逐語記録を作成した。インタビュー内容は、年齢や前職等の基本項目の他に、1.臨地実習中において、これまでの能力の内、有効だったもの。修正をする必要があったもの。2.修正が必要だったことに対して、どう対処していったのか。について、聞き取った。

5）データ収集期間：2018年12月中旬～2019年3月中旬にデータ収集を行った。

6）データ分析方法と妥当性：各事例の逐語記録より、研究目的に関連した部分を抽出し、初期コード化した。次にその内容の相違性、同質性を比較分析して、サブカテゴリーを作成した。その上で、意味が類似する内容を集め、カテゴリーごとにまとめた。分析過程において、スーパーバイズの助言を受けて検討し、データの妥当性を確保した。

7）倫理的配慮：神戸常盤大学研究倫理委員会に諮り、了承が得られてから研究に取り組んだ（神常大研倫第18-06号）。事前に研究協力の承諾を得られた看護教育機関の管理者（副学長や教務主任）を通し、協力者向けの研究説明書類を届けた上で、協力者本人から研究者に電子メールで連絡をもらい、インタビュー日時や場所の調整を行った。インタビュー初日の導入では、調査の趣旨と協力は自由意思であり中断の自由も確保されていること、回答したくないインタビューには返答しなくて良いこと、調査への協力をしなくても不利益を被らないこと、インタビュー内容は本研究の目的以外には使用しないこと、同意書を含む紙媒体や収集したデータは鍵付きの棚にて厳重に保管すること、研究終了後に本調査で得たデータは破棄し個人が特定されないようにすること等を、文書と口頭で説明して同意を得た。

結果

1．研究協力者の属性

協力者は現役社会人学生9名である。協力者の詳細を一覧表にし、表1に示す。

2．分析結果

語りの内容を、表2に分類した。以下、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを〈　〉、ワードを「　」で表す。

【経験が活きること】

これはサブカテゴリーが2分した。先ずは〈言葉や技の馴染みやすさ〉として、「高齢者の方とかかわってきたので、『だからあの人は、ああなってたんや』っていうのを想像しながら話が入ってきた。

表1　研究協力者の属性

協力者	進学時の年齢	性別	前職の分類	婚姻の有無
看護学生A	20代前半	女性	社会福祉	未婚
看護学生B	20代前半	女性	保健医療	未婚
看護学生C	40代前半	女性	保健医療→飲料サービス→社会福祉→サービス	既婚
看護学生D	20代前半	女性	保健医療、飲料サービス	未婚
看護学生E	20代後半	女性	社会福祉（保育士）	未婚
看護学生F	20代後半	男性	教員	未婚
看護学生G	20代後半	女性	小売	未婚
看護学生H	30代前半	女性	小売	未婚
看護学生Ⅰ	30代前半	女性	小売	既婚→離婚

表２　前職経験や生活経験が活きたこと / 仇になったこと

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	協力者
経験が活きること	言葉や技の馴染みやすさ	用語がスッと自分の中に入ってきた。	学生A
		高齢者の方とかかわってきたので、「だからあの人は、ああなってたんや」っていうのを想像しながら話が入ってきた。結構授業が分かりやすい。	
		看護技術は適応できた。	学生B
		介護の経験があるからといって、変えないといけないことは特に無かった。	
		子育てしてたので小児看護学を学ぶ上でひっかかりになったことは無かった。	学生C
		子どもへの関わり方というのは、実際に子どもも育てていたのである程度は分かりますし、母親の気持ちも分かった。	学生Ｉ
	関係性の構築	社会人経験をしている分、コミュニケーション力があるので、看護師さんや教員にも話に行けたりとか聞きに行けたりとかした。	学生A
		患者さんの表情を見ながら人間関係を築くというところは,初めてよりかはやっていけた。	学生D
		やっぱり子どもは可愛いなと。悩んだこともあったんですけど、関わってみたら子どもってやっぱり楽しい。	学生E
		話をすると、そこから話が広がってゆきました。自分から前の仕事のことを言うようにしていました。	学生F
		苦労したことはなかったです。	学生H
		患者さんとの出会いの場面とかで関係の構築を図る。	学生Ｉ
		患者だけでなく指導者、初めて出会う他の方への関わり方を意識していた。	学生Ｉ
経験が仇になること	体験レベルはさまざま	私には高校生も子どもがいますが、沐浴は私自身では一回も無い。だから、実習での沐浴が凄く怖かった。	学生C
		高校生の時にちょっとトラブルもあって気持ちも上がらずにいた。	学生D
		前は女性客が相手だったので、異性というところで難しさを感じた。	学生G
		私の出産が本当に順調で、産痛緩和を理解してあげられず教科書通りの対応しか浮かばなかった。自分の体験が活きたということは無かった。	学生Ｉ
	社会人の呪縛	「社会人経験があるから、うまくしようとしていない？」「浅過ぎる。だからこんな振り返りしか出来ない」「書けないのは振り返りが浅いから」と教員から言われた。	学生A
		実習に行ってると、関係性の方を重視してしまって、先読みし過ぎてそれが邪魔して言えなかった。	
		「社会人なんやから」って思う	学生C
		ハードルを上げるのも自分で嫌だったので、最初から保育士だとは言わなかった。	学生E
		教員から「真面目過ぎる」って言われます。	学生F
	コミュニケーションの違い	患者さんとコミュニケーションが取れないし、教員とうまく出来ない。	学生C
		保育士時代は子どもの目線に立って行動していると（自分では）思っていた。	学生E
		人の気持ちっていうのを分かってないな、自分って。出来てるって思ってたのに。	
		社会人って聞くと何でもかんでもコミュニケ―ションが出来て当たり前みたいに思われるが、看護のコミュニケーションは前職と違う。	
		（教師として）中学生を相手にしていた教員の頃は、相手から反応が返ってきていたので、違いに戸惑っていた。	学生F
		患者さんにそこまで聞いて良いのか？と迷った。	学生G
	葛藤	介護をしていた時の自分と看護を学んでいる自分がぶつかり…葛藤があった。	学生A
		「看護師と介護士は違うから一緒にしないでね」と教員から言われた。	学生A
		期待、周りからの視線も気にして。色々と葛藤しながらシンドかった。	学生E

結構授業が分かりやすい」などがあった。続く〈関係性の構築〉は、「患者さんの表情を見ながら人間関係を築くというところは、初めてよりかはやっていけた」などである。

【経験が仇になること】

ここでは４つのサブカテゴリーに分けられた。１つ目の〈体験レベルはさまざま〉では、「私には高校生の子どもがいますが、沐浴は私自身では一回も無い。だから、実習での沐浴が凄く怖かった」などがあった。２つ目の〈社会人の呪縛〉には、「実習に行ってると、関係性の方を重視してしまって、先読みし過ぎてそれが邪魔して言えなかった」などがあった。３つ目の〈コミュニケーションの違い〉では「患者さんとコミュニケーションが取れないし、教員とうまく出来ない」などがあった。最後の〈葛藤〉では、「介護をしていた時の自分と看護を学んでいる自分がぶつかり…葛藤があった」などがあった。

考察

本研究の目的は、看護師養成学校で学ぶ社会人学生の経験知と看護の学びが出会う中で、経験が活きることとそうでないことについて、特に臨地実習での出来事に絞って明らかにすることであった。

1. 経験が活きること

【経験が活きること】は、〈言葉や技の馴染みやすさ〉と〈関係性の構築〉に大別された。前者を構成するワードには「高齢者の方とかかわってきたので、『だからあの人は、ああなってたんや』っていうのを想像しながら話が入ってきた」に見られるように、病態の症状の理解が前職経験と絡めることでスムーズに出来たことが語られている。また〈関係性の構築〉を構成するワードの、「患者さんとの出会いの場面とかで関係の構築を図る」より、第一印象から人間関係は始まることを、身をもって知っている社会人ならではの判断や行動が見える。現役で進学した若い世代の学生とは明らかに異なる姿勢である。江頭（2008）の社会人看護学生を対象とした調査における、「自分自身の社会経験が授業のうえで役立っている」[6] との回答や、渡邉ら（2013）が明らかにした「社会人学生の生活経験と職業経験で培った社会的スキルを活かしながら」[7] 学ぶ姿勢と重なる。

このように、社会人学生たちはこれまでに体得した社会的スキルや判断力を活かしながら眼の前の現象を理解したり学んだりしていることが分かったが、このような学び方そのものを教師から教わっているわけではない。自ら、意図的で主体的に経験を用いて学習しているのである。これについては、教育における構成主義の視点で説明ができる。構成主義とは、「人間の知識は、すべて構成されるものである」[8] とする考え方であり、そのために「学習者は、積極的に世界と関わりをもち、知覚を総動員して思考を深めようする」[9] のである。まさに、社会人学生が経験を活かしながら看護を学ぶ姿そのものと言える。

2. 経験が仇になること

一方、【経験が仇になること】の語りは４つにカテゴライズされた。１つ目の〈体験レベルはさまざま〉では、「私には高校生の子どもがいますが、沐浴は私自身では一回も無い。だから、実習での沐浴が凄く怖かった」に代表される、妊娠・出産、子育て体験のある女性学生たちの語りをあげたい。これは、いくらそういった体験があっても、かなり個人差があり、簡単に母性や小児看護学実習に転用できるものではないことを示している。林（2013）による「母性看護学実習における社会人経験がある学生への臨地実習指導者の関わり」では、出産・育児経験の実習への障害として、「出産や育児を実際に自分が行ってきたという自信が、学生の知識の修正を難しくする」[10] と述べられているが、この度の協力者からの語りは、女性の社会人学生に対して、むしろ教える側が先入観を持って臨んではいけないことを示している。

２つ目の〈社会人の呪縛〉とは、「実習に行ってると、関係性の方を重視してしまって、先読みし過ぎてそれが邪魔して言えなかった」という語りから、臨地実習の場では学生としてそこにいるのであるが、社会人の立場も想起され、両者の間で悩む姿があった。これは、小野田（2003）による「社会人経験者は必要以上に期待されることへの負担や苦痛を感じることもある」[11] といった研究成果と合致する。この他、「ハードルを上げるのも自分で嫌だったので、最初から保育士だとは言わなかった」の発言も聞かれた。なぜ、このようなや判断を協力者はしたのか、小野田も述べているような「萎縮することのない指導」[12] だったのではなかったのかどうかも含め、我々自身が省みなければならない。

３つ目のサブカテゴリー、〈コミュニケーションの違い〉における「社会人って聞くと何でもかんでもコミュニケ―ションが出来て当たり前みたいに

思われるが、看護のそれは前職と違う」は、社会人経験と看護特有のコミュニケーションの違いへの戸惑いについて代弁している。しかし前出の小野田は続けて、「その人の性格や培われてきた過去の経験、生活歴も影響するため、一般化できない」[13]とするように、社会人学生一人ひとりの経験は決して同一ではない。また、ソーシャルスキルの習得状況もさまざまであると、教える側の認識を変えることで、過度な期待による社会人学生への追い詰めも避けられると考える。

4つ目の〈葛藤〉では「介護をしていた時の自分と看護を学んでいる自分がぶつかり…葛藤があった」「期待、周りからの視線も気にして。色々と葛藤しながらシンドかった」といった語りがあった。いったん構築された前職による職業アイデンティティを更新することの難しさを読み取ることができる。安藤（2010）は、転職経験を重ねながら自己像を形成してゆく過程における、転機に焦点を絞った研究の中で「転機における課題とは、新しいことを身につけることではなく、古いものを捨て去ること（unlearning）である」[14]と明言しており、この学生もまさしく介護職と看護職の間で揺れていた。

3. 経験から学ぶ力の3要素から見た社会人学生の学び

経験学習に詳しい松尾（2011）は著書で、「成人における学びの70％は自分の仕事経験から」[15]得ていると述べている。その上で、経験から学ぶ力の3要素として「挑戦する力（ストレッチ系の学ぶ力）」「振り返る力（リフレクション系の学ぶ力）」「楽しむ力（エンジョイメント系の学ぶ力）」[16]を提唱している。ここでは仕事経験を臨地実習におきかえ、この3要素に沿って、社会人学生特有の学びについてさらに考察を深める。

1）挑戦する力（ストレッチ系の学ぶ力）

松尾は挑戦する力が成長には欠かせない理由として「自分が今まで経験したことがない新規性のある課題や困難な課題に取り組むと、自分が持っていなかった知識やスキルを獲得せざるを得ないから」[17]と述べている。これは、どの社会人学生にも当てはまるであろう。前職を辞めて学生に専念するということは、収入が途絶えることを意味しており、そのことを受け入れて進学したという事実が既に、大いなる挑戦と考える。具体的な事例としては、学生Fの学びが興味深い。元中学校の教員だった20歳代の彼は、実習が始まった当初「（教師として）中学生を相手にしていた教員の頃は相手から反応が返ってきていたので、コミュニケーションのとり方の違いに戸惑っていた」そうである。そこで、ある実習で自分より年長者の男性患者を受け持った際、どうやって信頼関係を築こうかと思い巡らす中で、思い切って自分の前職のことやどうして教師から看護師になろうとしたのかなどの「話をすると、そこから話が広がってゆきました。自分から前の仕事のことを言うようにしていました」と語っている。これまでのコミュニケーションスタイルが通用しないと気付くと同時に、どうすれば心を開いてくれるだろうかと実習場面を思い返し、改めて相手の立場になって考えたのである。その結果、新しい接近の仕方を試み、見事に彼なりの人間関係構築法を見出したのである。これこそ挑戦する力である。

2）振り返る力（リフレクション系の学ぶ力）

「リフレクションとは、起こった事象や自身の行為を内省すること、すなわち振り返ること」[18]と定義している。ここに当てはまる語りとして、実習記録に対して「浅過ぎる。だからこんな振り返りしか出来ない」など、一見厳し過ぎるほどの教員からの指摘を、先ずは素直に受け止めたことから学びに繋がった事例を紹介したい。7年のキャリアを持つ看護学生Eは「保育士時代は子どもの目線に立って行動していると思っていた」が、教員の指摘を通して「人の気持ちってのを分かってないな、自分って」と、これまで意識したこともなかった自らの傾向に気付いたのである。これは、実習記録を書く

という作業を続けることで内省を深めたことを示している。これについては、渡邉ら（2014）の研究の中でも社会人学生へ教育活動への工夫として、「振り返りの指導等、自己省察を支える指導」[19]の重要性を指摘している。加えて、広く人材開発を専門として研究する中原（2012）も「経験は内省を伴ってこそ抽象化することができ、あるいはメタレベルの教訓を引き出すことができる」[20]と述べている。これらから経験豊富な社会人学生だからこそ、その経験から距離を置き、自らを客観視することに繋がる内省支援の重要性が理解できる。

3）楽しむ力（エンジョイメント系の学ぶ力）

最後に松尾は「エンジョイメントとは、仕事自体に関心を持ち、やりがいや面白さを感じることで意欲が高まっている状態」[21]と説明している。文中冒頭の「仕事」を、「臨地実習」と置き換えても問題ないと考える。2）で触れた、元保育士だった看護学生Ｅは、小児看護学実習で子どもとのコミュニケーションに悩み、保育士経験だけでは看護は通用しないことを痛感し、ひどくショックを受けた。しかし彼女は、そこで終わっていない。これまでの関わり方を思い返したり、実習記録に状況を書き起こしたりをする中で、内省を深めていった。その結果、次第に関係性が出来ていったのであろう。実習終了時点では「やっぱり子どもは可愛いなと。悩んだこともあったんですけど、関わってみたら子どもってやっぱり楽しい」と、語るに至っている。子どもに関わる専門職として、長年やってきたという自負もあったであろう。それまでの保育士経験を振り返り、自分は出来ていると高を括っていたところ、保育園で預かっていた児は健常児であり、実習先では病児なためにその違いは大きく、関係性を持つことに苦労したことが赤裸々にインタビューでは語られた。しかし最後は改めて、子どもとの触れ合いを「可愛い、楽しい」と実感し、自分の中の子ども好きを再認識し、この実習を肯定的に捉えていた。

松尾は、「自分なりの持論やノウハウが固まってしまうと、人間は成長が止まってしまいます。この時期を乗り越えて、再び成長路線に戻るために必要なのは『経験から学ぶ力』です」[22]と言う。看護学生ＥやＦの実習における学びは、それをよく表していると考える。さらに松尾は経験学習の要点を、「このモデルの特徴は、各要素が互いにつながりあい、循環する点」[23]と述べている。この度の協力者も、学生として再出発（ストレッチ）した後、臨地実習では時に思うようにならない出来事にぶち当たる。しかし、その度に内省（リフレクション）し、これまでの経験知やスキルを修正することで新しい気づきの境地に辿り着ける（エンジョイメント）、というサイクルを回していることが確認された。加えて看護学生Ｆにおいては、最初は経験が仇になるばかりであったが、経験学習のサイクルを回すことで、最後は経験が活きることに返っていっており、学びの繋がりを再認識した。

おわりに

本研究では、臨地実習に特化した社会人学生の学びの特徴を踏まえることが出来た。これまでの経験を活かした学びとして、〈言葉や技の馴染みやすさ〉と〈関係性の構築〉が見出された。一方、経験が仇となることとして、これまでの〈体験レベルはさまざま〉であり〈コミュニケーションの違い〉に戸惑いつつ、〈社会人の呪縛〉に陥ったり〈葛藤〉を抱えながら学んだりしていることが分かった。さらに、経験学習の３要素、〈挑戦する力〉〈振り返る力〉〈楽しむ力〉を用いるだけでなく、循環させつつ学んでいた。今後は、これらの結果を手掛かりとし、社会人学生ならではの具体的な学修支援に取り組みたい。

謝辞

多忙な中、快く研究に協力してくださり、貴重な

語りを聴かせて下さった社会人学生の皆様に心より感謝を申し上げます。

文献

1）厚生労働省（2015）．“看護師養成所における社会人経験者の受け入れ準備・支援のための指針”　厚生労働省．https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000079680.pdf,（2019-11-30 参照）．

2）1）P. 1.

3）三木隆子，檀原いずみ，關戸恵子．3 年課程看護専門学校の社会人学生の学習及び学習支援に対する認識の特徴．四国大学紀要 A（人文・社会科学編）2015,（0919-1798）　45 号 , p. 40.

4）荒川眞知子，興梠清美．看護学校が今すべきこと 1 －受け継いできたものを未来につなげるために－．看護展望．2014, 9, p. 60.

5）伊東美智子．看護職を選び看護師になってゆく過程とは－社会人学生の人生経路と unlearn に着目して－．兵庫教育大学院修士課程学位論文（平成 26 年度提出）．2014, p. 53.

6）江頭典江，堀薫夫．看護学生の学習への意識に関する調査研究－成人学生と一般学生の対比．大阪教育大学紀要．第Ⅳ部 , 2008, 第 56 巻 , 第 2 号 , p. 172.

7）渡邉惠，鈴木玲子，常盤文枝．看護専門学校（3 年課程）における社会人経験のある学生に対する教育方法の現状分析．日本看護学教育学会誌．2014, Vol.1, No.1, July, p. 62.

8）中村恵子．教育における構成主義．現代社会文化研究．2001, No.1, p. 283.

9）久保田賢一．構成主義が投げかける新しい教育．コンピュータ＆エデュケーション．2003, Vol.15, p. 12.

10）林聡美．母性看護学実習における社会人経験がある学生への臨地実習指導者の関わり．神奈川県立保健福祉大学実践研究センター看護教育研究収録．2013, No.38, p. 170.

11）小野田真弓．社会人経験と持つ学生の臨地実習における体験．神奈川県立保健福祉大学校　看護教育研究収録．2003, No.28, p. 87-93.

12）11）p. 87-93.

13）11）p. 87-93.

14）安藤りか．職業選択とアイデンティティ達成の関係をめぐる試論―数回の転職経験がある小学校教師の語りの分析を通して―．金城学院大学心理臨床研究．2010, p. 28.

15）松尾睦．職場が生きる人が育つ「経験学習」入門．ダイヤモンド社 , 2014, p. 48.

16）15）p. 71.

17）15）p. 73.

18）15）p. 88.

19）7）p. 55.

20）中原淳．学習環境としての「職場」－経営研究と学習研究の交差する場所．日本労働研究雑誌．2012, Vol.54, No.1, p. 39.

21）15）p. 104.

22）15）p. 3.

23）15）p. 71.